

古今和歌集 下



8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7

古今和テ集卷之十一

意奇一

ひらと

えんじき

時をなくや三月乃ちやめ草あわやめもあくぬ鳥とする

主は性法師

あとのときくれぬ蟲するがまそひるがひよぢをぬ

紀東

うづ川のまゆのくりあがるそんとうひゆ

友原信長

白猿の泣うきうてひがみをぬそたむれあくねぎ

ちゑふと方

あね山かよてまつてね坂の実乃くさくふぞとくす

とゆうありれそあくすそあても人よもとく川を波

せせはくうまきけむほ風のめふみぬ人と多くうりうち

おきろじまくひどりの日ひうひよそたりう車の下まぐれり

せのねろかのうすくまくわくとけうてけうてけうてけうて

身のわざく次みときぬ今度へあやしくて御あらん

五

後人トシテ

あすらぬほうあやまくふていぢんあらひのとくあうへ水を
くたがひあらはりよぬまうきるとだよ船とおもむりきうせのと
よまとくわめてほくえきりきる

たぶ乃是くも

身自持と書きとくておひきるまれぬふねへゑを
今のもほくとくとおもむりてうこあらきれんちとひのち
かすもとほりくとくとおもむりてうこあらきれんちとひのち

もくじく

山萬葉のまもりはのゆと見て人とうきへりえ

たうちゆとほくぬとひらわやへさかと人よほくえ

九河内より

神魔乃もくふねをすへしり中天のとおとありハ

けくゆ

蓬草へとくあらうふなう神の事へうつて無くするが

けくゆ

あらととくあくとくにほりうきもありハ船と玉乃とふせん

お

タヌキをかねておねそやあまのをなむ人とあくとく
うらとろおれまで我うあとくとくほくをや人たれ
ほきとたゞさんとくらぬくとくらぬのあくとくうりとくねとく
手と振りとれ私のゆくとくひとくもととくげねりへう
あらはひかきうきにましゆじとひすきとむれ方りに
もるがくとく子れ浦沿くとぬ日へあまをえとおとひねりく
夕行くよきくや島へ松れののづくともくぬとくまつ
是引く山あくとれられてたまくとせれそくの浦
表壁川のとくらとくわくとく水れまよとくしあひくとくねとく
鷺浦せれゆゆとくへありとくとくあく秋魚乃とくをとく
かくとくとくの山れ岩アヒムとくのと流てあひん魚りくとく
へとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ねのとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

是り入山鄰云わしやゑふうひつゝのアシトシト
えきれえ富ふあひかまうありせ乃のまてヨラガトリエ
急ギニコロモ流川はサ一街後赤はさきは水すくい人
裏てよどへてあくハ何とうハ急のまうれらはひとよせん
りよふ急か車をまげふきえよハ即とあひとの
秋多は人あきらめやあさだへ花のまうあらがくめ
河川のとめ藤原也あさだへ花のまうあらがくめ
人まゐらひやあそやわ、急のまうきれをきうのさ
らやもあひとあうんぬうれやゆくもたゆくとくと
ソ我と人かとうれそも海舟れゆみとめよが
伊セ乃浦よ船とも客船うをあれやんじうと色あうる
のきくみれあまれけりあはうちもてく御のみもあまん
波川らふ水と舟ひきねりよ時れ御方ナリクシリ
あゆ、あまへ岩かと松ハ生ふきの急はありますくめ
れが、この川考のちのまうにてどうなあきよをりる

鳥うおゆきまきれそほくのれをれて船とのまえりく
衣冠セタ多ふかう角ハクモくそ人をあひー、
トシヒく少林ミカチケンアリヒイフキ、
鳥、え、少林と、う、鷹、あ、く、ハ、あ、ふ、そ、や、じ、く、モ、エ、ス、ア、リ、多、
人の方モナリ、う、めと、阿、リ、テ、ひ、さ、く、ん、鳥、や、」ゆ、
あ、れ、と、向、う、と、のと、人、一、ま、く、と、う、と、
み、ひ、す、ゆ、と、ち、や、次、あ、ん、め、ち、あ、う、ま、く、こ、人、を、考、と、見、
次、事、も、あ、き、人、と、う、ま、で、山、を、う、言、「と、う、と、歌、は、ふ
行、水、よ、教、く、も、り、も、ろ、う、ま、く、ハ、あ、り、ぬ、人、と、り、う、ま、く、
人、と、あ、く、と、も、教、よ、う、の、も、う、せ、う、育、ハ、神、ん、う、
教、う、神、く、す、ふ、ま、く、あ、じ、じ、も、う、よ、う、と、う、く、小、差、い、み、
流、川、枕、あ、く、う、と、の、よ、長、も、う、く、ふ、る、く、は、そ、り、あ、
急、に、ま、の、お、力、ハ、を、と、加、よ、り、あ、り、そ、今、そ、り、ぬ、の、旅、

から木よのうぬ御方のあそりを、洞内川ようまそをせん
かりもろ新とすう方めひきへ流て下ふそめぬかうら
もせせぬあわせの秋神乃像めうてまき一そみと
おもくまとうぬまれ流乃う下は礼まとのもやゑりうらえ
芦もろさりへにちる波れあらじや人とくあしととは
くまぬあひとふもろがなうりのゆう御方水
やまねあらむとくらうぬもくふらうたると人へあらえん
道坂のゆくはをも我とく人や鳥と称のまばん
あは波ら室ふうりういづれいもとくよもひうまれ
うこまねうへは風まつうちうれや海さんとあら人のを
お鳴てよろんをふくじとれく人ぬばあくとそゑふ
くまうれよりうかこゑうすれにわとくよもうせん
よもげてあはまづうすのまくゆよりとがひ
あもとえはるかのくらうくあくは根ふとけくん
阿きともひまのうちりくすとくううる葉

まえれとくはくあうひよひのよひよりてまう
タまくはくひくひくたう神よ秋乃蟲々人ちまくそくや
のくももくひくひくひくひくひくひくひくひく
相の國乃浪よあそ人をあまくへ先あくらうて鳥れりえん
秋乃國の浪のとくとくの輪事のまのまやも和やまく
みうちの我えあやま苦とれあくら浪よあてまくは
阿く苦うたまれうてふくひて秋地あひうむけきほ
やくまどもの絲ちのまう春みきぬうもんゑのまくは

古と和歌集卷第十三

燕舞二

小野 小町

ちひきぬまそや人らみほん夏とあらせはるまくと
うくひくひくひくひくひくひくひくひくひくひく
ひくひくひくひくひくひくひくひくひくひくひく

卷之三

おまけにアモリの事で、おまかせだ
アリキアリトハアムニテアリ
アリのアマヤルカホ

けめくわ神よたまづぬ自か
金の氣運ナリテ
とぞり
とぞり
とぞり

うなづねり御よきとくさ
寛永時代のもの等 今

卷之二十一

おまけにひでわがまへりあはれのじゆくをうな
せんじゆの岸にうちて波ひらめく波
ひるめのまゝやあけとゆうれとあらみのま
まゝはうきゆふくちよまくまくらはすか
タキシテ蓑うりきよもくのまゝよやくからまき
まくまくひくまくまくまくまくまくまくまく

あやめのまへうきよがくまめひうりてそめく
川乃浦よなひくものまくらぐくよきまぬ爲もする
かきくくくく海白毛乃下もくじにじくても地
かきくくくく海白毛乃下もくじにじくても地

卷之二

まかよかられて此初回の事あつてかうり
爰能也と爲やちくら今よりはかくも神れひらてゐ

李氏詩序

さうかくてまかと人とどうもあとの本をむかへる

五郎寺へき

伊乃源ありせばうし衣のひよ神はあ

スルム里

絆よみとてひらめくもあふねとみ神でさりてスル

我くくわやうかとほへどれ時をとひあくまへる

二月山桜とたうこ風をすく称をたまひとるが

旅寄乃ちゆく時をすくよへどらぬ乃ぞとおりゆき

九河内えい

去乃へとまよふくへあひてはゆのとこうもとふ

清家山

秋あれとよしまたかくちふ我のめりや秋めりよ

秋くら

旅乃へふみれて是よ花乃きれりくまふ地とも立

大野

秋してあととて秋乃風れりまよれうよとよ人乃をま

うす

ふとよふぢりにわくとよ雲ゐよのとほくとくら

キモア

秋風よかとあひあひのちにまなう歌く人ひひそん

けいき

ぬふとよゆ流乃さへ水あられを立ちて下まる我ゑ

金子

あぬま芳やく山乃梅花人ほそよのまゆりするが

おとひづり

かよひづりふとのたうきらる人乃そとくじよま

ひりてき

我ゑにうふみや乃梅香すあくらるとかひよま

ひとれり

多川乃うふみや我すあくらるとかひよま

ひとれり

たまひぎてねくとくとせぬほまのうまくらるゑと我を

とくろり

育てふゆきと我めうかり衣うきをあらぬけのまもか
あはれもやうやうや山中くふけうどおりひそめえん
あくの花乃あくに海へあきとくとくあめわれひそ
よとくぬるひとくあくすは乃役へねうり釣り

我意はあくぬの意よほくふまくふそひうる
絶うづりくじくあく海よ役のとうとぬうりされ
白ふとくに役をもあれがくむううろひよより
多めとあゆうひきんぐく我をもひよりぬくせ

風かけへ底ふらうすゆま乃へうそつまうきあうく
月新よううかとうるぬあくはまうくの氣くやん
新くふくたうがくにせられたあくおとりひくせた

あく

浦乃みれ難波の芦せめをもうてあきと我意ゆくも

ひとわれく月日をふくらあく海うらがきよ下うちひとを殺
タキシムシのうひのう徳され我殺とハ我のうそトシテ殺
トシテかくしむぬ身をもあせ川下ふくとして多くを
悉くのうひのう殺身あれせりふうえほりからくら
氣するぬうりてきく阿うねうれきくねうち
桺うらむきはくはくはくうかくはくうかくはくう
我意へ行本をあくひとをほあくと限とくもくうれ意のく
象のうそくううううひとくはくありてもくせりく
とくやううくかくとあくいとくのうくとくを殺身
あめほくありそもくうゆうゆうゆうとくへあくうん
いのうやううとくの殺身乃あくねとくくうくとく

古今和歌集卷之十三

卷之二

金もひれそつともうりあるひよ今すめとりひて乃ちおぬ乃
ちうちるふみくはうきうき

卷之三

おもむろとぞひのむをそそぐふとあ
素平の良乃あゆはぬきら女のま
浦野のあゆも浦川の神のまゆも
みの女ようりてきにあら、なま
ゆくう神をひつて伏浦川のまゆ
よくたまゆとくとやく浦つきふをあ
流よがてひまわらぬゆゑよりんま
あわぬ良乃あらぬ事とほりきみへ
ひめへあらぬれづく柳木人丸を

かうりひくらの御書
御乃みまくわみの袖よりものりてありと
小野寺小町

なりひく
ものにて
小林 小町

まうあをもとめ筋力とうじよあ
りやうきあそてわまの内
ゆりひてあそひぬまへあれ見りあくやんとけ
みる乃はまきあくみじ引
かひそより風ふきれいなまふれやまくすなま
隠奥よりとりすなまれ川あまくあとりてがる
りやあきてまくせれあまくあ乃は高川まくして
金ひき我ちたまくれ情まくともあくほとく
まくゆくら

とうもよまふよもあさあへ立め／＼今くらぬよふ／＼
ゆく／＼れ五重弓／＼ふくと／＼とあそとゆく／＼か／＼
うり悪ひ／＼おかりされ／＼うり／＼とえ／＼とえ／＼てうさ
乃く／＼ま／＼か／＼ひきと／＼とひ／＼とあ／＼とれ／＼とれ／＼とれ
せ／＼み／＼ふ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

とえ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

今まね我身ひらめき／＼ひ／＼毎よおもねほ

せ／＼

と／＼

思ふれ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

あひ／＼て婦ふことひをきせばれせ／＼をもひ／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

秋乃夜をあはむ水うちあ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

あ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

あ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

あ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

あ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

藤原國珍朝臣

やぬとてとひんけ／＼ふあ／＼ひ／＼らぬとひとだ

寛永抄時事記の朝臣

やぬとてとひんけ／＼ふあ／＼ひ／＼らぬとひとだ

藤原國珍朝臣

あ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

あ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

あ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

あ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

あ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

あ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

業平抄居の身の事はりくらぬえま／＼人大にふ里
よ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

ひ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

あ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼

あやしむ事ありてんぢり風と爰とれうれう種とまも
かさうはゆる事とまもひのくにまうてと八世人今きよ
む、ふ乃やめりてはまうあらまへソラも風とめりて
ままでそ乃とまく月新よけりても風とあひしきが
あらぬと我名すてりあひまくまわりてまひを
あり川きしりひれ本筋れどりまくまくわひの筋
青野川筋れどりまくわひの筋れまよやくとえま
筋くまよとあひしりまくわひの筋れまよりまく
もまくわひよもてあひはきとじも下ゆひとのもとあ
あもまくわひとじも下ゆひとのもとあひよあひとじ
ちりかく勢をもりとく

修了の事

近頃ははるかに多くあつた。まことに、

此より、さういふことを、おもひだすよ。

アリタニシテ、其ノ余りの事は、
モハアリタニシテ、其ノ余りの事は、

あくまでも、めでたしかに力をもつて、ハリと毛をうなぎ

卷之三

卷之三

卷之二

おのれの酒すこしよ
おのれの酒すこしよ

みひくら

みすすくのうめんや次

ものあはれのうれひとまと河ひよみうせをめぐるとも

白川ひよみうせをめぐるとも
枝伊 千貞女

あくふのとめぐれそらすよりおもろみ流てとみますまんと思
せぬとめぐれひしてはより山橋ひの海よおぬアキ人 しらす

かほうへ歌すむ見あとあさかうんとようとくこふる
千貞女 桜もりえあつ人ほかこめと後とさりとくつと

風ひと波うじ春れねされや絶よ歌をそきうめむ也

この歌はほりんらしくうきりとよのくまうなり
多幸車ハ玉のとづり名乃きのハ吉野川のくさうと乃
村をめりあらゆられとよす車あくわもあすとあわ
あくわら秋名がよも霞時みも山あを並みらまち

あくわらと花すふかく御とのとちよとあくぬ名乃をよんだ

古とわう集參伴房 千貞女

枝伊

えんひくられ

鷺奥のあきうれ波乃まくらうよ鳥やよもん
あひすは鳥伴房 お車伴房 もなまくまくあゆき人伴房 うけ

いの作ふれあみち中くふるは鳥と黒ふす一やハ
君とびとすれまくまくはのりめくさくめく鳥

伴房 芙原のきくや

美ふくらむとみくわきく我西歌よもようの匂
るる行水の鳥宿まくらかくとうへんめいのとよう

いさのあ朝みゆきふくらとよくわ

えとくら

萬葉集
山川接矣アリあらぬ君はまくま
心をそぞりあさくねくおしゆくもくわ
かきくさん波とまくと夏草のあくもんれおき日ゆ
あまう川瀬モゼマテ世ありもじきめさん人言
寛平御時ニカレハ内えれ合のう
男ノムニシテ知のるや秋とて冬モロクぬ掛マアシ
小達ニ夜マテ此あらじもや我をまくわらひ
又モテラルカヒメ
毛モテ人我やゆんのひもひよ様乃板ととくに移
トアソトウヒトモトモ月乃月能月と物モツラ
月夜すヒビと女よ若モハニマニモハキモ
夷之ハ絶やまとつてニシテ我ハシテヒヨ素ハカイハ
えさるくわくの小難病とあり風と物と有キモ
あふるゝヒトモアリ山川接矣モケルヤキトア
波乃雲のあはり山川接矣モアヒムトモニテ
物まの事モヒアムヌタ夜あらと無けで連
鳥ヒトハキモ名付クン事アリナムニモテアムツ
みナリクガ須臾也アラ夜泊めアムニアラカアヒリヤ
クアシムカハ波モ思トシルカソニアムアヒリヤ
天乃車アムカムカレシナツ作モトシ中ミハシムキモハ
棒ちヒムシナムヒラ未トシハ我おりハ人トモアケ
ヒムシナムヒラ未トシハ我おりハ人トモアケ
里ノカムカムナカトモヒリ行君にアハシムカ
友承敬サ網呂カアリヒリ叶良多來アリカサドア
ヒムシナムヒラ未トシハ我おりハ人トモアケ

くるとすみまつてひやとりてうるときてのせうりうり
てよからりうる

吉宗素平相良

数くふあひあらはとひつみあさうるぬふうそぬうる
みがたうひひうれとこうもせうありとせとれ
りひでうえてほうきる トみへし波

ね月ぬさひくてあまこにぬれもあうえうれうれ

お月ぬさと名ようされ海てと路まうせはまてと地を

お月ぬ

う

後人ちう波

すやめ邊は邊はえり風とくみぬりぬ方にとひ絆は
玉くちうちさあまに波ぬきでしぬひうけうけうけ
たう里にすれどとてう波ぬたあゆかむれうれ
いあくをとみとと見月まればりんはとくとく
仰れあこせがりせばりう斗く乃ととみあうれうれ
いだりととあうとと見よたう波ととく波ハうのまん

素性法師

秋風まの木の葉れうれへ人れあうもひくとと思

寛平沖時さらひう官代奇合のあ

煙乃葉とまけうあとまく衣うじくや人代あうととくと
ほりう

後人ちう波

空ほらうめぐめのまきれを思れぬものかきぬと
わうそとくふりんかはううれうあそとくに後乃思うと
うれうととくふれうくうふくうもううくまつて思
わうれうとん我と根みゆくれと今船よがうんせせ
うくほれうとく川乃とくれをかうとや人れえ
うくほれうとく川乃とくれをかうとや人れえ

素性法師

うくひあと闇やハさりく山川の濁さく深ゆうわく波

後人ちう波

紅の山川あくあれ色深く思ひくのうれうすとせうれ
隣奥れゆよましもとれ波ゆゑよれまととく波ゆうれ

よみぐれ

せようのふせよくは風よなひあまらぬとす
ちひ色ふうのりあはせとくらむくじや秋の紅葉小野小町

阿まむとも黒もあらはあくあくにうるさくもの人の姿

くまひひ乃郎おのらあれふ我われがふくみとハ
色とあかととくよそくうちうら風りんとハあらゆくよ

めくらまくさんやあもきぬ我下ひとろとけよる

かを海ふ方それあしぬうもあがふれどされ袖をぬき

場にあぐたましとまゆうとううりあがふれとめくら

伊勢

わらふと阿連ゆとととよまくわりに袖やあまとうとほ

い筋よねまくれひきとくとくとくとくとくとくとくとく

くと黙ひよありまそりひくわりひくわりひくわりひくわりあ

はうすとくわりあうとくわりあうとくわりあうとくわりあうとく

大ほら夜

曲笛巻歌

事の次あらまのまこととあ

とんねりつれはあまくは
とくとてゑひえれまふむらひまそおのうねうら形アシカ

取れえとくはのよとあよとく人すよとくを取く思

すとくとく袖とひかんあひてり弱のわくをれまのた
中納之源うりふれお色あくれとけよ侍をみり

よもとて舞まりくる

伊勢

おほりタ波をもとあらがう見るゆうとくとくとくとく

月一

伊勢

夜よかぬあらめめあまそとくとくとくとくとくとく

衆

ゆうの月夜はすく見まづらん人をうねるよとてりむ
大富ハ高き人れ取えふねりうつとて詠めうふらじ
あまそらうるる我を抱せんよみくわ見る、さあき
ちろまのきく人れもとみゆうくのひうわいても
のうひうるぬひくわやうよやうひうれへうきうら
とくわくら

五七

春まくらうととてこまどあうめほすうとくの歌
けりうれ
かくこそそくわくわれとまくわくはるべ時とあらう
よと
古ヒ和歌集奉書する

五七

すゑのうらうれえのあらうとくの宿うるくはあそ
まのじひきうりするとむ月乃ゑり宿まきりよたんはく
うれしきはありふとくうれとえよみゆうてまく乃
うとあひてあゆれひひうそ月乃くまくまであう
ある板あくにまきりて後る

左原葉玉翁居

月やうくぬまやまれもあくぬ我身ひとのそととの月は
も萬まくらうとくふ里ひう波よあて人よじひうれ
左原葉玉翁居

もとく我とまくんなりうとくそとくやうじとせとあくうん
冬の月はやまゆとすぬあくに人よじとそそがうあ
まえひく

足をわきまへとあくらやうれなだくと今まくへ

五七

やまとあくをさたるわされ我すれやつとれの

後人下

むくみめあらふれあまくらまへとくめん教くらぬ
うさりくらむじてすおもくうきれくらまのじくらぬ
まよあひてねくようれ我神よする月さへゆくわに
秋あそちくは萬葉を詠すむ。わくを花乃もつからむ
もぬるやまの萬葉衣禊ことあらしゆとも小さきる萬葉
ゆくれ流るきくそりふくらぬ人えひ我そくま
あひくひがくうまされも川あやうめておりひ萬葉
勝乃鷗めぐりの見もくえり看くあぬよく我そく
くろくまはあらゆるか風乃まも人のさあんまん
ワ被まくこと前あひりゆ。ハ夷くあらよ船やあた
か舟せあそれどもりぬようけつりのほんのうるいん
是れまよとしゆとをゆめれどくがたねとありせ

あまくらむ萬葉あまくらまくらまくらめくらめく
まくらむあまくらめくらめくらめくらめくらめく
萬葉あまくらめくらめくらめくらめくらめくらめく

さくまくら

ひらりのくがあわるれつまられづとみのよらまをがひ
わやとがもとあさゆとあまくらめくらめくらめく
とあんじして別れぬうち思ひらうのゆゑみそきみ

後玉遍照

あらよと里あくひらうのなくたまくらめく
とくらめくらめくらめくらめくらめくらめくらめく
まくらめくらめくらめくらめくらめくらめくらめく
月夜よあらぬ人まくらめくらめくらめくらめくら
桂でいふれ秋田川まくらめくらめくらめくらめく
あらぬ人とね夕れの秋月ばくよあをうるみのうるみ

久一をとめようと仕内江のねへうへれあまをさる
惟乃のねやうふがゆれとあゝ前の秋はかく骨門は
なまひくねおきりてはまるとうきうにぬすけ
まへらくら筋と乃も小筋きりとくするともとては
うりすは

伴勢

三月乃よりふねうんじよも弱めの人もうへともハ
早う後
秋まよせ聖風とまこと秋もされうりと行う人れあんと
まくこ風ら

とあとも狼狽の事すうちぬまことうとまくまくろひ
人と思ひて海みるふわくはう風乃まくらんと礼め
なりひくね是うらわせほひとせんふ仕立すう
らむふととまそあうのありと多ふとまそねすまう
はうりのうきれととてつづく
聖まよせうもふも人内めりゆくまくれふれふはだゆう海
うりひくね相良

喜

ゆきうらやまのうてうるよ六我ゆるふ乃風もやまうり
名衣あれはすゆうまつまめうきてのとハ高人と曰
秋風もあとまうてーとまうきよ人れ名衣もふなまん
はまとかくねれとよもえ秋めりたれ紅葉ふね
あらじまくかすうるうわいとてはめすのとく
うちをこりて後とくらうれと後てほくうくまう

共附

あとの山林と見てそゆりあつましにちまつてと
ひひきりうれとれとれとれとれとれとれと
居きるうれとれとれとれとれとれとれとれ
えとれとれ

伴勢

冬まよせと秋めとよしだととあとまく山林
と

一

あれ後の方へうたおどりひかへて流れてねむあまた
まを川までりわきはまほめよ牧歌とくぬとあつて
お野川へや今まほからせんそひじよとよとよ
せやれみやまむめのうめひ角とさもえをきる
やくそくめくられはくらうつるふくとせんじゆる
きみてうつめよめせせんあくろれ花すとよきる
我のわよとくらしとくらうひん人ひくらりえ
あくとくらさんとくらんわくらりねる花とよきる
とくとくらさんとくらんわくらりねる花とよきる
そくめくらさんとくらんわくらりねる花とよきる
そくめくらさんとくらんわくらりねる花とよきる

寒玉井時代扇風よ秋うをきひきの時うをきする
思葉何ぞうまよのうひうつまがきんじくありうち
秋う風うひうみうすとくをうくふあふとくとく
うく風うひうみう風うせせん人のうく秋うう風
あひまうとくうとくとくとくとくとくとくとくとく
方うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
譽うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あひまうとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
寒玉井時代扇風のうえれ放合う

もやみやん

つまふはれとハ高ととあくよりしむらのふるみ

新うと

い勢

外見はくを海クハシヒカガシルトニヒシテ

北ゆと

うきとてあふ車とて我やとと見とひそ人のまふ
多車乃とひたゆる時ふくろ乃多シ車もあり
三ひくの時すれどれかとひとと多すなまく見

萩原あさう勢

恨てとなとととひんとをあと後よんゆる新うと
タキレハキとととおとししきれんとあくのむれ我ち
ヨクレハ我れ我れあくとさうりあまのすとてふくみる
阿シとわくととととととととととととととととと
ありを海う波れあれとみのれハシムとあとうすみを
あすりまかとさうとりるれとをさうほ我れうきる
あくれつりけりととととととととととととととと

秋風乃はくととさゆひととせ六をとち森あれきうらのち

山前
秋風うちあめのうとととれ我れ我れむととと

平とくゆん

秋風はくととととととととととととととととと

みくと

收

多く新力とくら舊に中移て全くよりぬもとをと
スをあくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

みくとれんと

あゆ事とあくとれ舊のあくとて意とくまくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

きれあいととれのやかうつうととれ川うるせ事

古と和歌集卷之十

哀傷す

いのうとのうゆりうる時あんぎる

小世うらむうの終

まく波氣うらさんそり川水傍みハアうりまれうら
さとひの月うらないまうらまみと山川のあらにそぞらう

はあく

らう波あらてそたうらゆ川を看うせまくれ名ふとう絶

はりうへんかわともきいまとらまくカアアうらうらうとき

ようまれよもまきてきれのうふうえうる

を離をうと見つもなくさめりはまろふうかうふ

のもつをのうひと

はまほむ聖め構へやあくあくうりひくとくとくめくとく

花茶飯引船長乃カナノうにうはよもくうれ

うすれ

古今下九

絲くも弓の袖でそみてうら木くはき縫のうそ夏よひる

弓の葉え

弓くもうのくらうられせゆふうくわう縫とおりひくう

弓ひくまうすあくせきまうりにうめうう

やうう内よるとのやハ美とくうんうあさせとく歌とく

弓ひくまうりにううううう

せとくくへ剛と歌とそとみくらぶととむふあううを

歌歌ひくとくゆうひくとくゆうひくとくゆう

ううふう時よ弟ひうううううううううううう

歌後

まくもくぬくわら風くもひうかきハ歌すてやううう

まくもくのうううううううううううううううううううう

うううううううううううううううううううううううううう

うううううううううううううううううううううううううう

うううううううううううううううううううううううううう

そくうおひゆてすあは

九河内うす

作多角のぬ小わらくねあかきたましんれきととをむり
ちうむとひして後る

あくらむ

夜衣もくもくふくひ人代後乃身のまくそをまくらまくま
ありひよをきれき乃身もまくらまくまくまく

ほくせき

わきにあれりて乃山當りをめ小うにせやどもひゆつぶ
さひよはれりととくひよゆつぶまくる

たまむ

裏襟乃あらたとへきみあれやくは襟乃あとのま
女の親乃おひゆてゆきよけすふとあらんじよひつぶ
さひよはれりととくひよゆつぶまくる

たまくらめ

是引ひよ單はとく襟乃衣の袖れむくと見を

たまくらめ

水乃面よあけく花人きよやくふとあらみうを乃山の月あは
ゆまみみくはまくらめ

たまくらめ

すまうきや脇乃とあひ新じてる四れ事アキアハヌ
はま乃みとれ序時よ益人の以せてもむむのまくまくまく
ちうと係署よだりふくられはえよせやとキムラヒテヒテ
乃山の日りてくらぢうてくらぢうてくらぢうてくらぢう
ゆきてあはくさあらたまうりあくと絶えひきを安てま
れ

傍正遍眼

みれ人をむの衣よたりぬとあけくとすくようときなせよ
の原乃おほはまくちまくめ方ゆりての秋の聲
けりとくらぢうてくらぢうてくらぢうてくらぢう
まくらぢうてくらぢうてくらぢうてくらぢう
くらぢうてくらぢうてくらぢうてくらぢうてくらぢう
夜衣乃くらぢうてくらぢうてくらぢうてくらぢう
わくくとくの傳せらとまである

ほくせき

時をけきなくあらふもくわくあくとまくわくをゑる
櫛とく多くあくけきて席くやむまくわくめくまくわく
櫛多くあくわくふされとせの急とアテとまくわく

さ乃そもひゆえ
老よりこそ人うあくかく汝よされつまきとえりすよ高んとくま
行くに引まくらふうきくへ家の事と見てよ多

行方不明の者を人命未だの機会と見て、

ゆき
ももさくらあまくらぬくさん人乃新之多
河原代のわくはまちまくらりてほく家
はくはくりてあくはくすくらはくとく
くまうりきとくとくとくとく

あくわくするの樂さすもえりあんぞれえ豫のとおまわり
むららと
なまき人乃やアハラく胸るうけて林よのとくわん
椎みまと毛アヒアん白をまちのとくや
大船のと宋院代との江とにまくはり多。とつく
石くわくとあくて女とこ乃ナリゆりよク。すよみの江と花
きる様乃クシヒのをとゆしつをくり多と
トドりてそれ、むくのをとすとくわくらき
アラル

あくまく乃人の如きありてかよハシホヤシ
アリトモアリテノリノ如祭る。时よりとさそえ方まく
えられ
お背り
りゆ

紅葉のと風よ雨のそぞろをれども、紅葉の

カナラうすんとておる。

萩原にまつり

病とあくわくあるぬとひきん御方もまふとぬせと
立まひしてからく放よる。時もあら

だりひきの移

はかま移とひくと穿かくめうとふはきりーと

さひらくやあひりとそをぬる。人をうつとそだり
きるみらかうてようへぬましとくとくとだり
小うれはみくゑよりてアラリてぬよなが、さひひ
て人よつを仰る。歌

萩原あけをあ

りそめらゆさうひちととあひーとがうりく能と

右とかの集卷百十七

雜序

後人へうも

萩原は病とくる天川と見る舟ひしれあつてう
ちふくらむとやむ。夜もくちゆくかまねまとる

うきよと何よつかんく衣たれく極くまあととくす
限うさあうたりふとお花へとまくぬぬふをひりる

ある人のいそくはすまんぢりとまくちまくの

ひうえんひとくわゆよむくとれまみがく表とまく
先のゆくこととてぬまれまう乃えぬとあつ。とてよ
みて重りくる。

だりむの移居

紫乃色あての附ため毛けらぬ野竹草本をわかれりと
大納言すらりうらふとされ朝臣寧わうり中納言と
御よどるよどよせめぬうのまくねれあやとくとくとくと
まくつうりくる。

まくつうりくる

玉形とんやくさんまくねくさくふまくとくとくと
いえの神れあじまくまつてくもとてのうといふと
とりはるとふとくうかりをまわりきれまくひ
りひつうりくるとくとくとくとくとくとくとくとく

うるひよみち

日乃光原あらうのハリのくまくとふ花と喰きり
二束乃原のまく東えろもとじかくとくとくとくとく

ほのまのままであるひの日である

うらむくねね

おはなや小塙乃山をさすと、代れとおひづり

五箇の事ひめと見てよかる。

いよしれひまた

阿ま川のをまろとひらむともよどめぬあつゝのん

え節れあきにんのふ乃らちると見てた

うかんとあらひてよかる。

阿東たのむはまうち君

ゆやあれと白ふいそくにさへたまや衰とありん

實ま内時ようのあくじよぬ事。そのこも、めとと
勢てえらいられずるをあわせだらかうとくら
ふそそくらむとくらぐとくらしてあとおまよそ
おてもくとくらに極よされをほしきううううと
きんりつとくらに極よらればくら人のあくふそくらがる

やくせきわ

玉きれらるるやいきくやくみれ秋の波がおさにかう

せもアリモアリひきれがまなる

まんきの波

まもくもう波ゆれねれおなれ穴もよあはね放す
めたゞよ人のあよあきらう財あや一乃まみき
勢くらうとくらふくらむとくらんけ。

たのくらま

はるあははははうすうれうううあくをもひゆ

ひくら

後人手次

まくわふ月あるかが足引の山ああもがひじ
我のあくまめの山ああもがひじてあくの月あ

たりひの朝

月あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
月あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

いあふ月れみくるとくわら

あとあとありひと水底よふらもあうていあ月け

卷之二

卷之三

大川をまほもむかえてもあくまくれひらりと身を月うかる
ゆきて月乃うらやましとあきこむりてそよぎうら
きのみ乃うりとまよとまよふうりてあくまくふうりと
あいとまよけよとゆうりとまよひたる月うく
ゆうりとまよひとまよひとまよひとまよひとまよ
後仰り

りそのまゝあらかじめのやうをひきあく
ひめ乃野中れ清ゆめうれと
おらまのとく海さしやうとくもとく
とくむれを我をひく八男のまゆ
とくむとくもとくあくまと

せかにありゆるよしはれあらうけに
さくめふありてむきのうじと
め月あらき乃とりせトキまおひぬま
えきさうけ乃あられちまよりひぬま
かそよ重とあぬ物とどりひてあら
きくわあゆあはれもつよ隠あく
えをりとも乃多くのうゑ

ちりくすをもとめしやがてかと
あらわにひきとあるをうんじりればかとふれよゆるとくと
さうのまふとゆううりもあひきよとひとふうと
とりとすくわゆう称とも月と春あがくつるも
やくめめいほじととへづれうりあくよつまなきなきは
後とづくまをうりてえとゆうんもとくゆううかいおひゆ
ゆうと

はあはあう人のまえは内へとゆめ
なりひくわが身はよくのみあらざるよ
まひきまつともとてゆくもえまづりにけられ

もあひはくよみづれをとむとまほにまこと
もてゆてまづりてこれとあとまちあくとまづる

歌

おぬまはまくぬまうれみとつゆくみまくゆき
せゆにまくぬあらあくめぢよすまきく人内まくゆ

まくまく時まくいがまの歌合乃あ

ありわらひゆのま

白毫乃庵あらーきあらーおとくとあひよくま
たかの山のまくひゆとあととまくとあくとまく

てあはくわらひあけづいてよつとまく

とくやさかね

もぬとそなまう歌合と書めまくわはあら
歌うらま

後人まくま

ちもやあらうら乃庵もなれとあひと思ふれ

我足てもくともありぬ住吉乃庵めむれ

とくやさかね

唐若乃庵のひめね人まくはらくまくととく

樟うのまく乃小來うのまくあくまく川ようをとくのと前えん

ひまくわる人乃くと賀中人もく

後人まくま

まく海のあまくあまくひふくよ漢の活ぬね

しよる

てあらあらううにまく歌れぬあらぬ波とてゆるあつら鷲山

和風乃原う勢と歌れぬあらくもるまくはまくとまく

とくやさかね

なまくもくと歌くもくわまく歌たまくはまくはまくとまく

とくやさかね

れまく源まくまく歌れぬあらうもくと歌まくまく

とくやさかね

かまくまく歌まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

とくやさかね

あひきまうる今内住まよて多く、よりほりりをほりりを
色音とほまはきくともなうかとふんとせれまおもとむす

あかげすうりうるぬたのくしぬとめもよきてまがる

夷之

西やもりあいへトぬとまやき、おふきうれぬぬふそゑる
ほ室や川よおりゆ、いろう日ほすがたくことつよ

奉とひうそとぬほりしき。

河と川のあれ川急と吹風ふきてふらぬ宿をもる

中勢れぞきら家は池と水とほりてからくとねとわ
きひきの日は室は後りにおりまきりおもふ

さりほくうりおつぬとくとくありふとみとそ

まりき

水乃うようる年のゑなく、あくもあらとつまきーわと

かく、といふおとこもる、まきはー

船までむかふからじくは、船乃よどいて風をひきる
布引ら游ます、そひる

ありくみせりまねる

あきらかにほ曉乃白玉御ひとまくとよあうに時の財をもる
中引ら際のとくゆそくあつまりてくまみりまくは

後も

ぬさみる今うらじし向むらまくもらう神れせりと
一の歌とみへある。水ぬけー

たうまく小ひまくさく、さく布あれやせきてられとくま
せらく

歌のほー

さくたうのゆゑくらもく山か夜となりてまくと
お門よあうてたまくとてまくる

伊努

木葉度ノ所門布引乃深浮後せぐとくとく月のよ

あうれ月おりよきて、河りうる時ふくみくぬくとくとく

ませきひきのふくらむ、くらふるあうとく

やうてまくとく布とヒタふくらむともやまふとくとく
ひえのゆくとくはのうとくとく

とくとく

おひきくわらやれ満あれやむけとまくわせぬ

屏風はあるむすめり

三葉乃田

風かまくあとまくぬゆきはまとてあうねよそゑをくる

田村乃所の女りれまくひうては風乃ゑの風

一色すくわらたりうらわおり一絆これとま

うそ井もとまくふくよか月をまくわせをまく

おひきくわらやれ満あれやむけとまくわせぬ

屏風はあるむすめり

三葉乃田

吹袖一時ものねがらくつて世がまなれやまくわせをまく

屏風乃ゑふすみあひきてうけふ

ほとあまうり

かりてわら山風ひどめあれてあまくわせをまくわせをまく

うきを

古と和詩集卷百十

詠す下

毛口

世界へゆうとあわと川まの乃瀬えきかへせふ形
つよしもあく一銀引とまくとく海人めり小男机
馬から巣ねね事にとよもとやうき房ぬ世界のうさ
ト野うしむ乃新

あらととまくじまくにあく一銀引とくまけうまくあ
ひうらしとむかう田舎者るの日ひまくよつううけ平
あくまく

愁くすふくわらゆるもそれぬをまゆりよゆくあくよ
文庫乃すとひて、みづのそくふからてあくまくまくそ
キくじやとひやせりまくまくによむる

小野小町

絶ゆまくまく草引のとくしてまく水あらハラ終

あもれて今まくまくせゆと思ふかれぬほりがれ

うくとまくまくまくとく處を夢をめうつ漫放すり

せやれりてむけくまとをあくふまもあらぬハ附ありき
あかはまうつゝうとを變へるはく汝をそめにれを
を申にらう我う乃もそし申とやいさんわからゆえん
すまハ猶のまひま半とあま世ばうさりハシムト
自多云乃とてぬあひく夜よすまきめハ猶めをあくう能
ありふえんとておひと年ハ泥乃さりと小風^ノ一くさ
前くあくとてひくんでうせめと申と能とをうふ
を申ハ其もりでうわりえん我う乃と申ふあらう
あかとよふを此莫本とわふうて是のちふれん
すうろとれあかく小畜を小せれうてはれうれふえん
世ふあれうたまうてスナリ寒乃陰みらかと申
いあん寒月乃申小をぬうハ其のうだとのまくさん
芝う乃くふくうてあんう汝申ハあうひもく
せやれりておひくにわくぬりく山のみとふがまう事やをう聞
あうれめみしぬと爲へづんよべらす人とほすうだりえ
みうはうのまくぼうう多
毛と種てゆよづくふすと申ふう見時ハづくらゆくらん
西ありひきう時ツミキミをまよとえとまく
とく丈よ何おひづくん行代子乃うさゆあきせとく
御ううと
毛とあ生とふと申ふあけまく是行乃うさゆとふをも申
本ゆをあく汝莫ゆをあらぬ行のよめくふ我うハ故め給
りう人せりとくあうりうるのあく
我ううと申と教つて人乃きめきうかううん
おえうあよううれよれとててあまのなうと死いきりそぐ
田もうちせすに申にあうりてほのうふ乃も申うるま

よあきりはうてえらうらよやうま今つりうる

をそりキ松居

わきのふと人あらひぬれぬよし一泊されつてよく寝
たを將監とけてぬうめふ女のあらひよとこそら
うらもすよみそつりうる

よもじかさ

ほまひこらかくまーととハ思はれり今まかをとくま

ほまかれて宿言の時もか

平生のゆく

うれせよハシマサのともゑくかく小ぢうねがれいてこそ
あるとてぬれぬまのほもひうれりそく思ひ次をうが
みこころのくらうれよやけとまつてほくにゆつては
ときを約する所ふむれる。そらとまむれ

ほりとめえととひきよほまれよ方法とまう
内ありうる人ひよつよ頬あくちひこまげくとみくらむ
うるけとくまくもんじもたまごとゆりひて後づ

ほ原ゆゑふ

ひらなまくはまとまうれはまじてくらむれ黒毛野
ばくはまはまうめよせ東中えむくせくらむ野毛

よそさままく

作務

冬の月申小あひうら里あれむむりどとそゑの手つるあ

紀乃とくまく病とれとけよありうらうじよしまあくま
むせせんとくまくのひとせりうらぬふくくくくふく
うあくとえとれをれまくまでみさりうれんにううう

うちむら朝居

とそくはうう紀拘とくまん里とハれをせよくらう

こまくらだとめとくかううひうとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ああてあもくふすりくらうてねくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

みひくらは

五

聖とまゆへうつておどりておまんじりみくにやハモハミムン
御

我とまゆあは乃くふきくはうためとまく乃キモテ放よき
ひまをある人むくゆくとみげつとうか乃ねくとりひき
ふしぐれもあくと乃くわせあようりあまくありてえを
ゆくとてつりうりうとまんづく

あゆうくくくひるまきわらりけともつまとく乃キモテ放
ときよそくへさんをかくせしもゆくもく門をせりてく
ゆくとてめり乃くくゆくてこきりきくくに候てほりき
くつる

水乃りりふりつき月れ浮葉のうれとあまゆ絲とくをぬ
人とくとくひまくまけりふあひくまきれをよむる
方と捨てゆきゆふくん思くらばうあわああくらあう
じゆくのがねうらういぬうらまくでまくらまくのく
まくらとゆてどんわりひびき乃くくたんつとくくまく
ひきりかうよまくる

若うかりひきとくとくはぬのまれとまうりほがあ

五

あまえれ

君とみらひあちだ白ふきつうハ雪乃まゆの新時あま
あうかりうるぐくつりうる

まゆくゆく

思ひあすあれ向のまく経よ一筋と景すかくぬ夜をみ

み人ちく次

いさあ小秋せき色あんまくりゆかくもく黒れあまくとく
我唐そくまく山くとく爲くばくくひまく命と松くとく門

くとくん法一

口う音を教乃き川とあくとまくじせとく治山とくとくそりと

あまくとくわづれいくお乃富あれやとくとく人乃喜作も

なまくまくらるぬよあまくとく家よめぞひまくとく

みくいまくらるる

傭人乃復さ常くとくよなきうらう教母乃稱えどる

あまくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

人喜作もとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

二葉

新古今

主みぐら波

世中ハつづまうまで、我あらんりとまろきを庵くさるも
をほりあへれ風もくもひされと仍東あら移し徒つや
風のうよほりうさとあぬ薫のまへれあともあら波ありぬを
おどりて波伊勢

伊勢

あまく川あらあとわくぬ我庵とせあつりゆくねうを絶
はく小舟をすりてまわりかうひつともちうる人れども
あまくうりてまわりてまわりてまわり

伊勢

あまくいし袖れあらや入まん家をせせられきあらも
寛平洋ゆくとろうのちも寝小めきれくねうる時う
あまくまわらひそとまわらもうをあくへるほのそ
よ後竹りきる

伊勢

すよ竹乃よがれうすゆ裏のむごとぞ地とありまうれ

御うら波

よみ人あら波

風ふきはらう白浪あらこゆはうやあひのひくりあらん
うる人の歌へむ／＼大れまくらりうる人／＼ひとめあらん
あひのうらうの女歌りあく歎て歌をまじめくがりあらん
よのこなむれがくりましりすれも／＼きあらう／＼ま
まきうれもあや／＼とあひてそ／＼あらまた／＼とくのを
とうこうひて月れかり鷺うらうおう／＼くまのを
せんざい乃あふうれとくえられとお文歌まをあとまう
さあく／＼ほくお歌てえくととみて福よされ、これな
ましてうれむり又日くもまく波がよきりとなんつひ
つくる

たうみきれゆつをもうかく歌く歌く歌あせゆうなりまくでま
わくまくん阿寒とそと風をもじあやとあらぬ波をもま
貞奴歌聞あふか集をつりりにうわのまくとくお
うまひうれむみてまくまくまくまく

文庫あります

御年月日を詣でまづや乃とれなふかまめかはれ
寛平時すこまつありたりてゆくとまうら
ちる
大に千里
乃の内むとれて乃鶴八事れりまくまくは
うちハノクムシん
今度は身も心もあらぬあらぬみをなす
舞り一きよたてまつうとそよみくわくよみつを
あくまづらう

大江歌集卷十九

經言

微人一言

ちやもあ
ひまひこ
さくれの
なぐれの
きみらと
えりあわ
うそのまへ
をまをね
かちあわ
きくまみ
いがみの
たまをの
とまを
お月せ
酒ありひ
みくさふ
大あとのま

たまひよし
うるひよし
かのまよし

わゆ中と乃

うれ竹乃 とくひかくと
うめゆくと
のをす
あられひく
おととす
きあしを
もみのまえ
くされよふ
ちりふつむ
これと思へ
まわして身乞
らはせよら
ひよしの
らはせよりの
わきやうて
かきとを

あひておひのまの
えうやうにとものゆ
ちうくれん
まうひれ えうやうを
うあく えうを表す
うなうよ ほうれむと
あうせまえ
うりふう うなうる
うへきの
おひれ風
たれのまの
わくまえ
ううめま
あく山の
おひとあいの
うりふう
あうやうを
うとひの勝
ううめま
あく山の
おひとあいの
わうえほん
あうやうを
ううめま
あく山の
おひとあいの
わうえほん

そらうか年

九月内移住

東方廿五

てくやれ 作年月あ
うりふう おうま
山の うそく日とよ
あくちく あくせれ
ううめま ううめま
あくゆこの ううめま
とうけふ ううめま

七深乃居

伊勢

おういき ううめま
ううめま あうやう
ううめま 深乃の海の
あくゆく おうめま
ううめま あうめま
ううめま ううめま

おのりお なまわりて おもひとうゑ

詠歌

新川

後人ちい

お波をさらさへおまへはそれとふゆくさるの匂

まうれのよまうれとぬむむまひすすふき

新川

後人ちい

おきりおふのよまうれとぬむむまひすすふき

あくたのむきのふれおせうのき物と月のあらわ

能作

新川

梅乃木れおふくろみをきめひくとくひとく

新川

前性清洋

山次乃木き夜のやまれとくまくとくまく

新川

前系敬行新臣

ソノモハ因まほくきくうめをあてれとく成行がくよ

七月のるあふくろあらわくとく

新川

前系敬行

いきとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

新川

前系敬行

むほとむまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

新川

前系敬行

むほとむまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

新川

前系敬行

秋風おほとほひゆ／＼おうあゆつゝせてまきりくとる

ちとまくとん／＼まう月とありの家のこもり風のと

故にうきとえをもとめりてみをけりうる

ほづらうかくす

きあくしよみ乃とありれをされとやほりそと
まつゆ

きりうと

のそとくわうやあひる作としておはいとれ
花より経より意乃とめられとさんとれとぞことかくふる
色くさうかと方ともびつとまけきそれおきくもむか
ひりゆくとくわうそくうひもがくとくおなまくもおなまく
みかのひはくとくえくお思ひれりうなとくあよた
をとくわうれきとくわうきとくを
やろとれあくぬあふとくとくとく
さくらのこ

おお小町

人よりく月乃あれよ思ひとくしのくとくひよくを
おお年月時とくいのえの秋合のく、

かうりてく

ま萬キれりの八萬あゆとゆえてくふんとつもと
とくすとくのまくまくとく

キ奥文

春の乃あきれまくまくあくよどひとく組れりとく
秋の小萬あくまく麻れりとてあそ秋萬あくまく
はのれじくよくとく衣れなれりうんぬわやあく
これのあくまくうれりとく移ぬふりの絆めがくとくまく
候人
あくまくぶせりとくまくひとくねなをせやれぬまくとく
あくまく人万れをとくとくもううれりとくとくとく
かくとくとくうひとくとくとくとくとくとくとくとく
秋とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
わくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

年もるやふ

おひきとよおとわまくやひしひきりさり
生ておさんとくわくとまくらにまくひな
おほきりいとあまれと人をあくせとううすみ

一平山人

ひづると報せはまくめどされやのひくとくふくらす
まくらの風きりけくひとや我よハ人れつきさうしん
ウ一月よゑハ今すとくわくのうとまくと我わゆ
まくまくとまく小なりぬまハあくかくと八月あくちり

よ中興

まくうへりくらくよあくまくとまくと我わゆ

たのむねまく

まくそれぬあくまくとまくと我わゆ
修業

あくまくたくまくとまくとハ報せとあくたく

あく人

まあたれうあふまくまくとまくとまくと
修業

まくう

むらのあれとくの物うりんありておとおを我ひきりえ
とこからまるとくふくとて人のひきれも

とくまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

太陽

かをまくまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

さゆさ

あけとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

太陽

今あるとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

さゆさ

雪くまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

さゆさ

せやううとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

さゆさ

をやううとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

さゆさ

まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

何ぞてあれどもふむんむれりんとを爲

がまう勞

方を捨てゆきゆくやをすほはいからとすく

すく

あく事乃とあくらう力へありゆきとやくまくぬめよそ

み人へ次

梅乃もされてのはれかならねるやまきのよみのを

は里あ川より

たりう日うるふたうひよきりを

るをとほりてうめを捨て

見りらふまうりあたそ見り乃とせうひわくすかハ

計ら次

後人あく次

世をりひみとくとく小赤くりとうあくめあわせ

古今和歌集卷才二千

大内和御 あ

肩をひひる

新一紀年始よりじもうふみとくみとくみとく

日本紀一ハ

まくめと絶つまくまくまくまくまくまくまく

あもとくらううさかくは落多々すく聞くあくは極る

あくあく

あくもとくらうあくくれをうのくふくそせうあくぬえ

くらうくらう

水くらうとみ原くふくと阿連と稱てのあきやあ寄

あくあく

あり山うちむくられをうかゆひ乃鷦うさうくまく

せわくひひる

秋うきらむし落乃むれをうかく彼のままよあくりあひ能

くらうくらう

まくもくれああのむろふ人とひとをううふ山うくきよ

うよはく

落乃むれにとむなるまくにううを付くうう

くらうくらう

唐奥乃わくられまうめうひうはまくらりこまひくふ
ヨリ門ういと舟れあくらまくとまくぐくまのハラミ生み
ひきめの放

うきくましのくま川よ物とみてありて水ううけまくがる

あさきくまくまの舞

あさきくまくまの舞とみて景うらゆすの花八梅のくみさ
まくのくまくまの舞とみて景うらゆすの花八梅のくみさ
ばうはかわのうのくまくまの舞

舞絶やくまくまの舞とみて景うらゆすの花八梅のくみさ

まくのくまくまの舞とみて景うらゆすの花八梅のくみさ
あれをえきのくまくまの舞

あく代きくまくまの舞とみて景うらゆすの花八梅のくみさ

くまハ仁わ乃所をのまれくまの放

大体乃くめ

あくのや鏡の山をとてなまははひてそるるるうふとせき

東教

みちのく

あくまにうりきくまくまの舞とまくふとまく

うちくはくまくまの舞とまくふとまくふとまく
わきくまくまの舞とまくふとまくふとまく
がくくまくまの舞とまくふとまくふとまく
みくまくまの舞とまくふとまくふとまく
とうくまの舞とまくふとまくふとまく
君とくむてあくしゆとまくふとまくふとまく

あくまくまの舞とまくふとまくふとまく

むちのく

ほくまのくまの舞とまくふとまくふとまく
ほくまのくまの舞とまくふとまくふとまく
かひくまのくまの舞とまくふとまくふとまく

甲斐うひと静うひて一吹風と人をもよへうせん
ま乃酒はうえうかわひたむれりとあくねせん
そろ焚火まつりぬ、友京と一ゆきみわくん
ちるやう焚火乃私れ娘小松もくらふもくらふ
家く称他申すを多々心に重裁うと別さ

卷第十 物名歌

ひく
うゑ人をまめりうひ引弓山の原すひとひとひうち
立時多下やほ上

移居

うきりてとがふくたまのうそも君くら八浪のとくがふ
とく年まの本方あ下

くれのれと

うすくまつされと夕暮れねとけふのとみと見るか
思弟利貞下

古今下單一

とまゐかるやううあ

よくまさら

うじよく邊行下

うせよ、あをと

ぢやとら

うれめとぞとめとおとそのとき行雲れあづらふの雲
は秋ハ水行むれとくのまよとめとめとめとめとめと

附ノ一
附ノ二

卷第十一

奥山舊ねーのさよ多下

まよとあづらやま大井川あづらやよもくまくわ
まよとあづらやまのとれやまへあはとくまくわ

卷第十二

うりきとくまくわとくまくわとくまくわとくまくわ

はうあらんあめのみよみのあかこのうひのふるつと

五

ゆあらまねの鷺のよそぞれ人乃あくと我とひるを

果實十記

ゆりの木のよもや秋とれて下

ゆとりひめうひくりのみととらひまつりて

ゆきとくとくとくありとくのくとろあまひる

源義父とハキタマキんとまくん下

けくわさ

たまくはほとやとゆくとくのえらびおおすゑりま

ま

古今和歌集序

夫和歌者託其根於山地名^{シテ}花於詞林者也人之在世不能無爲思慮易遷妄樂相寔感生本志詠形於言是人逸者其聲樂怒者其吟懲可以述懷可以發憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於和歌倭諳有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫眷寫之時花中蝶蟬之吟樹上雖無曲折各各歌蘊物皆育之自然之理也然而神世七代時質人涼情欲無以和歌未作遠干素盞鳥尊而生雲國始有三十一字之諺今反歌之作也其後雜天神之孫海童之女莫不以咏哥通情者爰及人代此風太真長歌短奇旋頭混本之類雜躰非一源流漸滋譬猶排雲之樹生自寸苗之煙淳天之波起於一滴之露至如雞波津之什獻

天皇富諸河之篇穀太子或事闇神異或與入幽玄但見

上古哥多存古質之語末為耳目之翫後為意誠之端亡
天子無良辰羨景詔侍臣預宴庭者獻和音君臣之情由斯
可見賢惠之性於是相分所以隨民之欲擇士之才也自
大津皇子之初化詩賦詞人才子慕風繼塵移彼漢家之
淳化我日域之俗民業一改和諧漸襄矣尚有先師拂卒
太史者高振神妙之思播芳古今之間有山邊赤人者並
和歌仙也其餘業和音者綿々不絕及彼時雲澆漓人貴
奢淳淳祠雲無絕漏泉涌其實皆落葉花孤獨蒙玉色
之家以此為私鳥之使乞食之客以此為活計之謀故半
為婦人之右難進太夫之最近代有古風者絕二三人矣
長短不同論以可辨毛山僧正左得哥之躰然其詞花而
少實如蜀畫好女徒勤人情在原中得之歌其情有餘言
詞不足如葵花雖少彩色而有董香文琳巧蘿物然其辭
近俗如賈人之看縣衣寧治山僧喜撰毛詞蕭簾而首尾

停滯如望秋月遇曉雲小野小町之歌古衣通始之流也
然絕而無氣力如病婦之萎花移大友黑主之歌古稿九
太夫之姿也顧有逸興而躰甚鄙如田夫之息瓦薪也此
外氏姓流傳者不可勝數其大底皆以絕為基不知歌之
類者也俗人爭奉榮利不用節和歌然哉雖貴相將
寫絛金錢而骨未腐土中名先滅於世上適為後世被知
者唯味歌之人而已何者諸近人耳義慣神明也昔平塚
天子詔侍臣令撰万葉集自尔以來時歷十代數過百年其
后和諧弃不被採用雖風流如聖掌相輕情如在納言而
皆以他才固不以斯道顧

陛下御宇于今九載仁流秋津溯之外惠茂筑波山之隱
溯妻為淑之尊卑開口研長為譽之頌澤之滿耳思緒
既絕之風欲無久廢之道裏部大內記紀文則御文所引
紀貫之前甲斐山國允阿內躬恒若瀨門府生壬生忠岑

等獻家集並古來舊歌曰續芳葉集於是重有詔部願所奉之請動為二十卷名曰古今和音集活等詞少春花之絕名竊秋夜長況哉進恐時俗嘲退慙才藝之拙適遇和請之中無以樂音道再昌嗟乎人丸既沒和歌不
在斯哉于時延喜五年歲次乙丑四月十八日臣貫之等謹序

右者从

飛鳥井大納言雅章卿祕事之脚點本正寫之畢

延寶二甲寅歲三月發行

寛政十戊午年九月重鐫

文化九年申年七月求板

江戸下谷池之端仲町湧原屋伊八

青藜閣藏版書目錄		江戸東巖山須原屋伊八
四書集註	道春點大字 最勝堂新板	十冊 朱子心學錄 金谿王貢解 二冊
通鑑擧要	姚培謙平山 張景星二銘	同錄 大學章句纂釋 古賀精里先生著 合刻二冊
周易古註	魏王弼注 晋韓康伯注	五冊 四書便講 佐藤直方先生著 六冊
同 正文	穀山先生校正	三冊 女誠 後漢曹世叔著 一冊
物理小識	明方密之著	忠珍先生新注 一冊
文子全書	南溟先生校	四冊 桑陰比事 宋桂萬榮著 三冊
七經孟子考文補遺	明沈淮著 善庵先生校	二冊 新定儀禮圖 高田侯儒臣 村松先生著 二帖
孝經會通	大學國字解	一冊 關尹子 白井真純校 一冊
鹽鐵論	明程榮校	六冊 中庸先生述 二冊

大清廣輿全圖

水戸赤水先生著

禮記王制地理圖說

赤水先生著

彩色箱入一枚

唐土ノ地圖世二行ル者善本有才依テ
先生多年研究テ此一大圖ヲ製ス水陸道程
山川ノ種界日景星度ノ遠近ヲ量リ以テ天下
ノ形勢ヲ知ラム

歷代州郡沿革地圖

水戸赤水先生著

博覽古言

林道春先生譜解

五冊

周職方氏圖

春秋列國圖

附錄三乘國考別子五宗考十二律三分損益考歲星

戰國七雄圖

禹貢九州圖

行度考二十八宿星圖考七曜右旋圖等ノ載ス

西漢州郡圖

秦三十六郡圖

格言ヲ擇出シ君道政事文學武備禮法官制刑

東漢州郡圖

兩晉南北朝圖

法祥瑞祭祀人倫人事臣道風俗至リ十二門

唐十五道圖

春秋列國圖

二部ヲ分ツ學者善ク熟讀三五ハ誠ニ身ヲ脩メ

亞細亞小東洋圖

秦三十六郡圖

國ヲ治ル一助ハ云五更有博物多識益凡ル事

尋常ノ地圖ト異ニテ毎圖分度ヲ量リ方尺餘

紙面歷代ノ變化沿革ヲ微細ニ著シ席上ノ奇

モ少ナカラシ

觀ニ備フ尤ニ讀史家涉獵ニ臨テ成敗事跡ヲ

探索スルノ勞ナカラシタメ五彩ヲ施シ一覽シ

テ瞭然クラシム

博覽古言

古名管轄抄

五冊

相傳フ昔相公編輯シ玉ヒ延喜帝ヘ奉ラセ玉フ所

書有六六經正史下八諸子百家ノ書ヨリ要語

ヲ心カケルニ甚ダ益アル故ニ博物モ坐右ニ置キ書

西域聞見錄

清七十一指園著

道雲先生訓點

三冊

潔朝樂事

明朝ノ年中行事ノ記ス

一冊

國字ノ隨筆ニシテ雅俗ノ考証ヲ力ア子學問

ヲ心カケルニ甚ダ益アル故ニ博物モ坐右ニ置キ書

作詩字例

芝水先生著

二冊

增訂宋詩楚

天民先生著

小刻

宋詩語二編

天民先生著

二冊

冷齋詩話

宋僧惠洪著

二冊

金詩選

清顧奎光選

四冊

元詩鈔

清張二銘選

四冊

宋詩語二編

山松雨先生輯

二冊

同譯註

同著

一冊

璫珠詩拾

天民先生校

五冊

同小刺

同上

二冊

同律詩

老山詩禪雨先生撰

一冊

范石湖詩鈔

同上

三冊

方秋厓詩鈔

清吳孟舉選

二冊

同大家妙絕

寬齋先生撰

一冊

宋詩鈔

天民先生校

五冊

同譯註

同著

一冊

元詩鈔

清張二銘選

四冊

金詩選

柳灣先生校

四冊

宋詩選

清顧奎光選

四冊

同

一齋奎閔

小刻

洪公嘗テ東坡山谷ト交リヨシ清談佳譖喜フ

驚シ一度此書ヲ覽テ愈快ト賞歎セナルハナシ

孝經樓詩話

北山先生著

二冊

頓悟詩傳

葉玄之先生著

小冊六冊

先生非常ノ論ヲ發シ唐宋詩學ノ真偽ヲ辨
折スルハサラニ作詩立意ノ緊要ヲトシ文考
證ニ益有ノ書也

東藻地名箋

增補小刻

一冊

作詩志穀

北山先生著

二冊

會彙 宇内ノ山川府城郡縣名等舊跡ヨリ審寃幽
邃僻遠地ニ至ルマテ盡ク網羅シテ遺スノナ
蓋シ古今名公鉅儒ノ詩文集ニ就テ尤其雅
訓ルヲ拾牧シ亦時令人事器用禽獸草木等
異名ヲ附錄ス詩作文章尺牘ノ必用ニテ坐
右ノ清玩ニシテ且旅行ノ懷宝トス
在ヲナスノ書也

詩學小成

千葉先生著

小刻四冊

此書ハ時令ノ門部ヲ分チ亦贈答即事
等ノ題ヲカケ熟字ヲ附ニ韵變ヲ属シ又轉
句及ヒ平仄ヲシル不初學師傳ナクトモ作詩ノ自
在ヲナスノ書也

唐詩平仄考

瀧玄淳先生著

小本二冊

唐宋明ノ詩作ノ異ナルヲ論シ附錄ニ徂徠
南郭ノ詩文章ノ謬誤ヲ舉ケテセシ書ナリ
李太白杜子美ノ平韵仄韵ノ作例ヲ鈔出
シ附錄ニ而韵ノ字義ヲ述ル
教導シタモウ書ナリ

四聲韻選

芸閣先生著

小刻二冊

四聲世々ニ変アリ然レドモ近體唐ヲ以テサトシス
平仄ヲ陰トニテ天然ノ聲音コニアルヲ知ラ
サルヲ憂ヒ又近世大家モ平仄ニ泥シテ字義ヲ誤
ヒアルニ依テ其作例ヲアケ辨折シテ正路ヲ
自自在ノ妙用ヲ知ラシム

初學文軌

大典禪師著

二冊

尺牘筌

瀧州先生著

小本一冊

和漢諸尺牘中ヨリ初學日用ニ便ナル語ヲ採摘要
ニテ和解ヲ附ス語ヲ求ルニ甚速ナリ

作文志穀

禪師積年ノ精研ヲ以テ漢文ノ正確ヲ擧示ス
和習ノ浮俗ヲ脱出スルヲ諄タ教授ミタマソ書也

北山先生著 小刻一冊

尺牘彙材

淡園先生著

小本三冊

諸大家ノ良村ヲ選ミ叙懷存問錢別慶賀時候
其余數ヶ条ノ部門ヲ分チ大成テ國字ヲ附ス
具ツ寫式ト和俗漢雅ノ作例ヲ對照シテ變化
自在ノ妙用ヲ知ラシム

文草小成

芸閣先生著 小刻六冊

尺牘

瀧州先生著

小本三冊

和漢文ノ和譯ヲ覆文ノ法ヲ示シ和文ヲ漢譯ノ死活ノ弊
名悟ラ云曰衝談卷說戯作ノ作文難事ノ亦少知ラ云
和解ヲ附シテ取用頗ル便宜ナリ試ニ香一炷ヲ
テ一事ノ機軸ヲ知ラニ實ニ作文ノ捷徑ニテ直
二筆頑花ヲ生シ妙用神ノ如シ

文藻行潦

北山先生著 小刻三冊

經史摘語

瀧州先生著

二冊

經史ヲ主トシ諸子百家衆流ノ書ニ至ルマテ盡ク
抄撮ニテ其出所ヲシテ專ラ作家家ノ咄蹉ヲ辨
セシタノ伊呂波引ニシテ探討シヤスカラシム博物ノ
君子モ必遺忘ニ備フヘキ書ナリ

文章尺牘ニ用ユギ古今ノ雅語ヲ平常ノ俗言
ヲ以テ集メ部門ヲ分チ伊呂波寄ニス

初學作文ニ臨テ急速ニ其語ヲ求允ニ
甚便利ノ書有

君子モ必遺忘ニ備フヘキ書ナリ

紀効新書

明戚南塘著
平子龍先生訓點

六冊

單騎要略製作辨

村井昌弘先生著

五冊

往昔ヨリ舶來スル所ノ書三種アリ各異同
アツテ諸君子疑評スルト多年アリ今茲ニ
翻刻スル所、戚將軍晩年ノ定本ニシテ東
伍篇ヨリ水兵篇至テ通計十八篇アリ實刪
定ノ全書ナリ

西洋火攻神器說

明何汝賓著
平子龍先生校訂

合刻

國字解

日本物先生著
平子龍先生補闕

二冊

此書ハ巨炮ニ攻守戰三法アル事ヲ論シ詳ニ
其器（形状ヲ圖シ）大小銳筒ノ鑄造彈丸ノ輕
重火薬ノ煉造法ヨリシテ放チヤウニ至ルマテ具
其製作秘術ヲ載

歐西事小言

南陽原先生著

全七冊

國字ヲ以テ医学脉論ノ秘事察色狐羊
見分ホニテ委ノ記シ病因病名ヲ古書ニ考
ヘ經驗ノ良方ヲ以テ療治ヲ教ヘ且家ノ秘
方ヲモ附シアラハス

騎士用本并圖說

閑重秀先生著

一冊

騎馬士一件ノ書ニシテ馬具兵具ニ至ルマテ
製作且用上房ノ便利或ハ武術執行ノ肝要
等ヲノベ将九字ノ極秘ヲモ論セリ

新刀辨惑錄

荒木一濱齋著

三冊

此製ハ天文ヨリ慶長ノ頃マテ中古戰國ノ時用イテ矢
石ヲ避ケ坐作進退ニ武威顯リ、所ノ利用ヲ宗
トシテ古代ノ武器ノ悉ク一変セシトフ圖
式ヲ加ヘテ懸ニ辨ズ

中古甲冑製作辨

柳原香山先生著

三冊

此製ハ天文ヨリ慶長ノ頃マテ中古戰國ノ時用イテ矢
石ヲ避ケ坐作進退ニ武威顯リ、所ノ利用ヲ宗
トシテ古代ノ武器ノ悉ク一変セシトフ圖
式ヲ加ヘテ懸ニ辨ズ

傷寒論類方

清徐靈胎著
官醫多紀先生校

一冊

經穴彙解

南陽原先生著

八冊

此書方ヲ以テ類ヲ分チ症ヲ以テ方ニ係ケ加減
消息ニ至ルマテ精當簡核ニテ傷寒論ノ津
梁也ノミアラズ實ニ症ヲ見テ治ヲ施スノ楷範
ナリ吳江ノ徐先生權奇英發ノ才ヲ以テ八十
餘年工夫ヲヨラシ著述セル所ニ近世未曾有ノ
珍書ナリ

傷寒考

山圖南先生著

一冊

難經經釋

清徐靈胎著
官醫多紀先生校

二冊

此書ハ古河三喜翁ノ著ス所原先生ノ家蔵ノテ
歴試極メテ多シ且記ス國字ヲ以テ卷冊浩大ス
披尋甚々便ニテ單方ノ最モ簡要ナルモノ也
三喜翁ハ甲斐德本翁ト並ニ称セラル弘治
年中明ニ渡テ医術ヲ學フテ二十年歸朝後
道三翁ノ師ト在高名ノ良医、是以テ此書医蒙
帳秘ナリト見タマフシ
帳秘ナリト見タマフシ

三喜直指篇

南陽原先生補訂

全三冊

病犬ニ歎タル藥方条法刺法禁忌治驗ニ至
ルテ其術ヲ著ス附スルニ毒蛇諸虫毒鼠咬
等ノ即妙ノ方法ヲ舉シ急救回生ノ方書也
難經經書ハ古來ヨリ内經ノ精要ニ本テ其蘊奥
ヲ發ス、トス今此書ハ其ノ素問靈樞ノ義
ト相乖ク所ノ辨駁シ定メテ秦越人ノ作
セス總テ經文ヲ以テ經文ヲ釋シ經文
證スベキナキハマ、仲景氏ノ書ヲ引テ二語
セス舊注ヲ襲ハス深文奧義片言半句ニ
燦然トシテ得失ヲ摭ヒ鉄錙ヲ校スル微
妙ヲ極古未發ノ書ヲ難經指南車也

近葉菴根集 情水演臣大人撰 八冊

長野長波道大人撰

下河音長流傍湛水契仲良園の諸大金始より外諸名道家集よりれるまで
きもあつめて解説より室乎今人の春秋
ちめんたゞ小毛と画するあらうに
杭洞袖九帳 戸次火養大人輯 一冊

かみくわくわくと注解とよりて冠辞
かみくわくわくと注解とよりて冠辞

校正 裝束拾要鈔

二冊

芭蕉其角嵐雪去来
京葛丈草乙由等の
あくわくわく

温古 江戸砂子 菊岡沾涼編 六冊

丹治恒足軒補遺 同上

同 増補再板

八冊

徳和歌後萬才集 同上

二冊

萬歳狂歌集 四方大人撰

二冊

星せ代翁心傳集

一冊

續江戸砂子 菊岡沾涼編 五冊

江戸地圖一枚附先板

七冊

土華子訂補

七冊

星せ代翁心傳集

一冊

芭蕉其角嵐雪去来
京葛丈草乙由等の
あくわくわく

諸の法式と外形脚の時不拘の示すてあうす

江戸總鹿子大全 土華子訂補 六冊

同上

同

芭蕉其角嵐雪去来
京葛丈草乙由等の
あくわくわく

二冊

同那、かや、少

芭蕉其角嵐雪去来
京葛丈草乙由等の
あくわくわく

二冊

俳諧天狗問答 雪中庵撰

二冊

碁立絹節

八冊

同上

園碁定石集

玄々齋主人著

同四番碁立

附卷局機

四冊

近世用あら不の右左と隅の定石とを載又四番碁

八代前は家人が因房道智先生常に門考手小説と教

「絶うほりして實不万世不易れ石死」と云ふ一局接

八代生のの方表あれハ裏うづぶりの孫考文選

是より行ひ碁種小道碁のあり希有が如今

名すば序トシモ既と排之先共初かと大不益を

碁經連珠

四冊

爛柯堂元美先生著

古今名人の手稿をあつて、圍碁の志ある者不

上達の階梯とく常と益右を置げき書なり

碁經拔粹

玄々齋主人著

四冊

世各全の碁二三四ツを碁け打切すて残す

たる手かり書く遊ぶ専と開まし書なり

碁經選粹

四冊

玄々齋主人著

世各全の碁二三四ツを碁け打切すて残す

たる手かり書く遊ぶ専と開まし書なり

碁經衆妙

四冊

爛柯堂元美先生著

世各全の碁二三四ツを碁け打切すて残す

たる手かり書く遊ぶ専と開まし書なり

碁經選粹

三冊

玄々齋主人著

世各全の碁二三四ツを碁け打切すて残す

たる手かり書く遊ぶ専と開まし書なり

碁經衆妙

三冊

玄々齋主人著

世各全の碁二三四ツを碁け打切すて残す

たる手かり書く遊ぶ専と開まし書なり

碁經選粹

三冊

玄々齋主人著

世各全の碁二三四ツを碁け打切すて残す

たる手かり書く遊ぶ専と開まし書なり

和漢名畫苑

大岡春卜翁纂

六冊 農隙餘談

信陽利根川農叢述

一冊

漢土之古画新画及外國画諸圖本朝上吉善
之名人雪狩兩流土佐家及雜画迄委寫出之

畫圖醉芙蓉

鈴木芙蓉先生画

三冊

農事をすく小教農民平生状況示年中氣
候を知りめまし七十二候を教も海も農
家の通達ある

山水人物草木鳥獸其外雜圖寫意沒骨

等漢画之精良古本也

日用書札辨惑

上原茂雅先生著

三冊

世間通用のそれより紙其外ともむじむ地図
もは式うる記ゆ不於今し文言文字本の誤
をあらすばれりて上原氏家私のかいも
傳集まで同板も初々墨つたのよとおまほ
古実合ひきそば去小トハ單陋のあき
げや成ぬるべし

訓蒙天地辨

高井蘭山先生著

三冊

此本ハ天地の中あらゆる事物を天地辨學
せて理をあらむ月の行道にして雷地震をも
またちせんの五種辨と經て至當小の事
記すに繪写をりつて解説ありこれ至先譯文のよからぬを一本なり

雷震記

後藤梨春先生著

一冊

含錫紀事

台州先生戲作

小本
一冊

恒
久

年

大
事
記

(三)

